

第三百四十七回 青葉会

平成二十七年二月二十六日(木) 午後五時半〜八時半 丸紅来客食堂(談話室)

〈選者〉

〈出席者〉

〈投句〉

〈紙上選句〉

《互選句》

- ☆ 川合万里子 先生(御自宅でリハビリの為、外出されず)
- 今井紀久男 小川恭延 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤保明 小西弘子
- 豊田ゆたか 中野一灯 福島正明 山崎亜也 山内天牛
- 伊賀山そらお 大林猛 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 星田啓子
- 宮内規雄 渡邊盛雄
- 赤田堅 楠田彦十 在間千恵 庄司龍平 橋口隆 早川允章 村田くに子 山崎青史
- 山本三恵

六点

- ☆ 何気なき妻のひと言山椒の芽 孤舟 (万・忠・弘・龍・ゆ・隆)
- 師の礼状文字美しく寒明くる 忠彦 (恭・孤・龍・允・く)

- ☆ 鬼は外茶室の内に笑ひあり 五郎太 (万・恭・保・龍・隆)

雨水来るピケテイの本暫し置き 全 (紀・忠・灯・隆・三)

(☆…三段切れにならない様に「ピケテイの書を暫し置き雨水かな」)

引鶴のなんなく攫ふ三津五郎 弘子 (紀・孤・正・亜・三)

その中にアマゾネスみて寒泳ぎ 昇 (彦・五・正・青・三)

- ☆ 春愁やなかなか溶けぬ角砂糖 孤舟 (万・弘・青・天)

- ☆ 寒戻る夜半男手の釘付 一灯 (万・紀・天・三)

丸盆に水を残して雪鬼 規雄 (彦・五・亜・三)

三点

小気味良き芸継ぐは誰(た)そ臚なり(三津五郎追悼) 紀久男 (千・亜・天)

(☆…「臚なり」は季語になり難い。「誰そ」を疑問形に。↓「小気味良き芸継ぐは誰ぞ星臚」)

百寿祝(ぼ)ぐ河東節(かとう)連吟うららかに 全 (堅・ゆ・允)

- ☆ 春時雨児等の黄傘に囲まるる 恭延 (万・灯・く)

- ☆ 春寒し黒猫まどろむ母の膝 保明 (万・允・く)

- ☆ 富士よりの航跡一筋しらす舟 弘子 (万・千・青)

(☆…「富士からの航跡一筋白子舟」ら音で韻を踏んでリズムカルに)

高々と組む脚線や春きざす 堂哉 (龍・灯・隆)

古写真捨てる捨てざる二月尽 堂哉 (龍・ゆ・く)

着飾りし犬かしこまる梅見茶屋 ゆたか (忠・弘・允)

- ☆ 双つ星光芒失せし春寂寥(坂東三津五郎追悼) 全 (堅・紀・彦)

- ☆ 黒潮の沖光り会ふ花菜風 一灯 (万・孤・允)

- ☆ 目で復習(さ)ふシヨパンの楽譜春灯 全 (万・恭・允)

春風や靴に翼が生えて来る 正明 (孤・弘・ゆ)

(☆…下五が「生えて来る」では春風や翼の躍動感が薄くなるので↓「生え初め」)

街角は鳥語人語の春めきぬ 昇 (紀・正・亜)

折取つてどこに飾るか梅の枝 そらお (保・青)

艶(つや)やかな楷書芸見せ逝く春や 紀久男 (忠・三)

病める身は何はともあれ春を待つ 恭延 (忠・保)

還付金ありて追儼の福は内 忠彦 (恭・正)

虚飾みな振るひ落として古雛 孤舟 (堅・亜)

蓬餅香りが紡ぐ過ぎし日々 保明 (ゆ・灯)

惜しまるる踊り名手や凍返る 健介 (紀・五)

鶏立ちし藁に卵の無き春昼 弘子 (孤・ゆ)

少し噴き醬油焦がして栄螺焼 全 (孤・天)

温顔の名優逝きて春寒し 恵洲 (紀・隆)

大雛壇据えて市役所新庁舎 全 (千・亜)

二点

☆ 恵方巻福招かむと手作りす  
☆ 塗りたての郵便受けに雪うさぎ  
乗り継ぎのホーム地吹雪募り来る  
咲き繋ぐ蠟に紅(くれなゐ) 白き梅  
農曆は太陽曆ぞ春立ちぬ  
我が庭のいづくからともなく暮の声  
文且来土佐の明るさ連れそいで  
病める樹へ忘れじと来し初鶯  
浄瑠璃のしみ偲ぶや冴返る(追悼清本志佐雄大夫)  
春初め芽の出る音を聞いたかも  
冴返る指に息かけ月夜道  
白魚に出会いて酒のすすむこと  
時雨るるやタイヤの跳ねる雨の音  
失恋か足に擦寄る昼の猫  
戌(いぬ)の日のお宮参りや光る春  
落椿人は別れを繰返す  
白梅の太木揺れて鳥の影  
麗らかやまだ整はぬ花時計  
☆ 菜種御供(なたねご) 野点(のてん)に惹かれお参りし  
梅東風やまず改札に望む海  
人の性なほ善ならむ斑雪  
のれそれにちびりちびりと床の梅  
餅二つ食らうて立春祝ひけり  
春陰や目薬上手く差せなくて  
黄水仙田舎暮しが合つてある  
春霞羅針盤無き船が行く  
☆ 雪置けどいのちあるらし萌える芽よ  
立春は声ばかりでなし天の底  
踏切を電車徐行し春兆す  
僧院に徒歩(かち)にて渉る大潮干  
☆ 容赦なく豆打ちつける二才の兒  
福豆とおまけにくれた鬼の面  
呼び止めて焼芋三つ千円で

一点

ゆたか (万・千)  
一灯 (万・青)  
全 (紀・保)  
啓子 (堅・紀)  
亜也 (恭・彦)  
天牛 (彦・保)  
全 (弘・千)  
盛雄 (堅・紀)  
紀久男 (堅)  
猛 (弘)  
全 (保)  
全 (正)  
恭延 (く)  
忠彦 (隆)  
全 (五)  
孤舟 (千)  
五郎太 (龍)  
孤舟 (く)  
保明 (万)  
弘子 (灯)  
健介 (五)  
ゆたか (彦)  
全 (天)  
正明 (恭)  
全 (忠)  
全 (隆)  
啓子 (万)  
全 (五)  
亜也 (天)  
全 (灯)  
天牛 (万)  
全 (正)  
全 (青)

「万里子先生の米寿と快気を祝して」

春の空米寿に祈る師の快癒 恭延 主(あるじ)待ちて匂ひをこせる梅あらん 恵洲  
河津桜さき先生の米寿祝ぐ 天牛 草萌えや師の退院と米寿の報 啓子  
雛祭り主(ぬし)は目出度き米寿にて 正明 白寿への道の確かに春の空 堂哉  
花の下句を友として米祝(よねいわひ) 規雄 快復へ強き師の意思福寿草 忠彦  
目出度しや師も癒えられて春動く 保明 梅の香や米寿の詩師とこの道に 全  
紅白の梅こもごもに米寿の師 一灯 源平の梅も目出たき米寿かな 五郎太  
梅が香や米寿の氣力に弟子脱帽 紀久男 フランスでは二十才(はたち)四つの春うれし 亜也  
米寿の賀快氣も祝ふ梅見かな 全 今年また共に見る花詠ふ花 弘子  
再会祝す河津桜と姥桜 孤舟 ひとときはの試歩を励ます桜の芽 全

●次回青葉会

三月二十六日(木) 午後五時半から八時半 (丸紅 談話室)

▲当季雑詠五句 投句二句

四月二十三日(木) 午後五時半から八時半 (丸紅 談話室) 以上文責 紀久男

一 今回は四ヶ月ぶりの天牛さん含め12名出席。投句9名。天牛さん正明さんから常連が揃いますと俄然談論風発活況を呈します。持ち寄りの銘菓（弘子さんのゴディバのチョコ）美酒（天牛さんの美々卯の凍結酒、正明さんの「魔界への誘い」、忠彦さんの「大七」純米生飴。小生の「吉乃川・杜氏の晩酌」純米吟醸（長岡））どれも旨くどんどん飲み食いして当会らしい盛り上がりでした。先生から頂戴した句評・添削と一筆箋、天牛さんの季刊誌「流域」（松原秀一追悼特集）、孤舟さんの第三句集「蒼茫」と結社誌「爽樹」3月号、盛雄さんへの「金子みすず顕彰全国俳句大会表彰式のご案内」のコピー（「飛花落花不良少年老いにけり」が宇多喜代子らの選者より優秀賞）、小松義人さんからの「一木会淡彩スケッチ展」案内状等を回覧。そして急逝した三津五郎の短冊五句（「楽屋句会」）を展示。

先生の米寿と快気祝の会を延期する経緯、ピケテイの翻訳出版社みすず書房のこと。堀口星眠と和田悟朗の死、日経の「私の履歴書」連載中の重久日揮グループ代表のこと等を話題にしました。久しぶりの孤舟さんの披講で、御覧のように孤舟さん、五郎太さんが高得点でした。

二 関係者近詠

星さがす電飾の空クリスマス	真希子	人日や株暴落の見出しあり	允章
真剣に二十一世紀の聖夜劇	全	待春や雪に顔出す道祖神	全
厨事で始まり終ふ去年今年	全	洗顔の顔のつつばる寒の水	全
山茶花を抱かせ愛犬埋葬す	弘子	小児科医に適ふ温顔春隣	全
塩引の塩ごつそりと湿りをり	全	イニシヤルにデートの日なり初暦	全
笹鳴の葉も揺れず藪の中	全	菓喰ひ女友達嬉々として	全
ブツクポストへ音堅きかな寒波くる	全	老いたりと言へ待春の靴を買ふ	全
昼まではもたぬ氷の張りにけり	青史	「大鉄会」二月	全
木を抱いて木を宥めては霜囲	全	霾るや実存のわれ影法師	盛雄
袖買うて湯に浮かべやる忘れけり	全	早春と言ふあやふやな日に惑ふ	全
妻の背のとどかぬところ年用意	全	人の世の片隅も良し春巡る	健介
精油所の白煙太し冬青空	全	早春や匂ふパン屋の列に付く	紀久男
着膨れし我が身散歩に委ねけり	全	ひとひら <small>かみひちけん</small>	全
煤逃げの友といそいそ鈴本へ	全	一片の初花盃に上七軒	全
図書館にアンパン食 <small>くも</small> ふ冬日差	全	梅が香に背筋をのばす天守閣	盛雄
海老蔵・玉三郎の「鳴神」	全	「きさらぎ句会」二月	全
冬うらら海老・玉コンビじわを呼び	全	春立つや水あふれゐる手水鉢	允章
「萬緑」	三月号	石庭や砂に浸みゆく春の雨	全
遺言を秘めし日記や去年今年	盛雄	音もなく流されてゐる春の鴨	全

毎日新聞2月4日兵庫文芸 若森京子選

三 2月21日59歳で急死した三津五郎の作品：「俳句」一月号掲載 自選10句

春光や柿茸落の初櫓  
春光や皇后さまの首飾り  
花の夜の仏無口におはします  
何ごともなかつたやうに白餅  
ぼつくりの音遠ざかり夜の秋

四 孤舟さんの第三句集「蒼茫」（平成二十三年刊）  
立春の土へはつしと打つ楔  
エーゲ海より春色の角封筒  
右顧左眄せぬ螳螂のしたり貌  
書くほどの自分史は無し心太  
肩書きも袂も脱ぎのつべい汁

「俳句」一月号掲載 自選10句  
掘割に俯いてゐし秋裕  
いつしかに小声となりて冬座敷  
かにかくに百万石の冬の暮  
母の忌の湯豆腐ほどの温かさ  
能管の一声高く初芝居  
より小生好みの句を抄出してみました。  
蝶となり蒼茫の海をさすらはむ  
鶴唳や朝の曠野を引き締めて  
背負ふもの少しづつ捨てちやんちゃんこ  
冬銀河ここで言はねばもう言へず  
朝市の秤を零れ螢鳥賊